

偉人探訪

須賀川人物辞典

二階堂氏の城下町として、また奥州街道の宿場町として栄えた須賀川。悠久の昔から続く時代という舞台の上で、須賀川の次代を築いてきた須賀川の偉人たち。その大なる知恵と勇気、そして熱い想いは、今も脈々とこの地に息づいています。

重 欧堂田善

[aoudo denzen]



あおうどう でんぜん
1748～1822 / 江戸後期の画家、銅版画家。代表作に「新訂万国全図」「医範提綱内象銅版画」などがある。

重欧堂田善(本名・永田善吉)は、寛延元年(1748)、諏訪町の染め物業・永田惣四郎の次男として生まれました。三重県の寂照寺の僧侶に教えを受けた田善は、須賀川本町の庄屋の依頼で風景図「江戸芝愛宕山図」を屏風に描きました。寛政6年(1794)、領内巡視の際、その庄屋に立ち寄った白河城主・松平定信は屏風に目を留め、田善の才能に感銘。画家の道を奨励しました。寛政10年(1798)、定信公は日本版世界地図製作のため、田善に銅版画技法の習得を命じました。12年後の文化7年(1810)、我が国初の銅版画による世界大地図「新訂万国全図」を完成させ、また文化5年(1808)には52図からなる日本最初の精密な解剖図「医範提綱内象銅版画」を製作。当時の西洋医学を日本に伝える医学書として、明治時代に至るまで何度も増刷を重ねました。



国指定重要文化財「銅版画東都名所図」中の「東都名所全図」

定信公の隠居を機に、須賀川に戻り日本画を描きながら晩年を過ごした田善は、文政5年(1822)、75歳でその生涯の幕を下ろしました。

小 林久敬

[kobayashi hisataka]



こばやし ひさたか
1821～1892 / 安積疏水の実現に尽くし、須賀川市周辺の水資源の確保と農業発展に大きく貢献。

安積疏水の実現の功労者である小林久敬は、文政4年(1821)、須賀川に生まれました。猪苗代湖と岩瀬地方が一望できる斉木峠近くにトンネルを掘れば、経済的にも時間的にも最良の策であると考えた久敬は、「斉木峠案」実現のため、全財産を注ぎ込んで水路づくりに入り打ち込みました。ところが、明治12年(1879)、安積疏水工事に着手した政府と県は政策を変更し、沼上峠への工事を進めていきます。久敬は工事の現場で様々な進言を行います。久敬は入れてもらえませんでした。しかし工事はオランダからの招へい技師・ファンデルンの指揮の下、順調に進められ、わずか4年で安積平野へと通水したのです。形はどうあれ、通水式で水門が開かれ、湖水が安積平野へ流れると、久敬のかねてからの悲願はついにかなえられました。その後、2年後、疎水実現への情熱と見識が、ついに政府に認められ、民間功労者として明治天皇から銀杯を賜りました。明治25年(1892)、71歳の生涯を終えました。



顕彰碑と辞世の句碑(諏訪町 神炊館神社参道脇) 句碑には「あらのし田ごとにつる月のかげ」と刻まれ、その情熱は今も語り継がれている。

柳 沼源太郎

[yaginuma gentaro]



やぎぬま げんたろう
1875～1939 / 牡丹園の保存管理に一生を捧げ、全国唯一の国指定名勝「須賀川の牡丹園」の基礎を築く。

柳沼源太郎は、須賀川の牡丹園を語るうえで欠かすことのできない人物です。そもそも牡丹園は明和3年(1766)、須賀川の薬種商・伊藤祐倫が、牡丹の苗を現在の兵庫県宝塚市から買い求め、薬用に栽培したのが始まりと言われています。明治には、牡丹園は柳沼家へ譲渡され薬用目的から鑑賞用へと切り替わりました。須賀川町の2代目収入役柳沼新兵衛の長男として生まれた源太郎は、父亡き後、牡丹園経営を引き継ぎました。15歳で上京、牡丹で専門的に学び、帰郷後は牡丹栽培一筋に励みました。また、源太郎は俳人としても才能を発揮。大正時代には原石鼎の門に入り「破籠子」の名で数々の名句を残しています。昭和7年(1932)、牡丹園は国の名勝に指定されました。しかし、不況が続く牡丹園も経営難となりましたが、一族で手を取り合い、この難局を切り抜けました。牡丹園に二世を捧げ、源太郎は牡丹の美しさを後世に引き継ぎ、昭和14年(1939)、64歳でその生涯を終えました。



国指定名勝 須賀川の牡丹園 園内には290種、7000株の牡丹が咲き誇り、多くの観光客を迎える

服部ケサ

[hatori kesa]



はっとり けさ
1884～1924 / ライ病(ハンセン病)患者 専門の「鈴蘭病院」を開業するなど、ライ 病医療に一生を捧げ、大きく貢献。

40歳という短い人生を、ライ病(ハンセン病)患者への治療に捧げた服部ケサは、こころ須賀川に生まれました。文学を志し上京したケサは、与謝野鉄幹らが主宰する「明星」に投稿するなど、早熟な文才で活躍。しかし、家族の相次ぐ疾患と看護がケサを医学の道へ導きました。明治38年(1905)、21歳で現在の東京女子医大に入学。大正2年、最難関の医師試験に合格しました。その後、勤めた病院で多くのライ病患者と出会い、ライ病治療に一生を捧げることを決意したのです。大正6年(1917)、ケサは草津聖バルナバ病院に赴任。ライ病患者のみならず地域医療を支える医師として活躍しました。大正13年(1924)、草津栗生村に日本人として初のライ病専門「鈴蘭病院」を開院します。ところが、開院からわずか23日目に心臓発作で帰らぬ人となりました。鈴蘭病院は昭和6年(1931)に国立療養所・栗生楽園となり、ライ病医療に大きく貢献しています。



公立岩瀬病院(北町)駐車場内に建つ 服部ケサの顕彰碑 レリーフと「頌徳」の二文字が刻まれている

円谷英二

[tsuburaya eiji]



つぶらや えいじ
1901～1970 / 「ウルトラマンシリーズ」や「ゴジラ」など、日本映画界の特撮映像の発展に大きく貢献。

「ウルトラマン」シリーズや「ゴジラ」などの怪獣シリーズを生み出し、特撮技術を日本映画界に普及させた円谷英二監督。彼は、明治34年(1901)、須賀川中町の由緒あるこうじ屋に生まれました。本名は英一。少年時代は飛行機の模型作りに熱中し、16歳の時に就職のため上京。大正8年(1919)、18歳の時に映画会社に入社し映画製作者としての第一歩を踏み出しました。その後、松竹京都撮影所に移り、日活を経て、昭和12年(1937)、東宝撮影所に入社。「ゴジラ」「モスラ」「ラドン」などの特撮映画を次々と世に送り出し、日本映画界の発展に大きく貢献しました。昭和38年(1963)には(株)円谷特技プロダクションを設立。テレビ用の特撮怪獣もの「ウルトラQ」などのウルトラ・シリーズを製作し、「特撮の神様」と呼ばれ、その名を不動のものとした。長年にわたる数々のヒーローを世に送り出した円谷監督は、狭心症による発作のため、昭和45年(1970)、68歳の生涯を閉じました。



ウルトラマンモニュメント 須賀川市とM78星雲「光の国」との姉妹都市提携を記念してJR須賀川駅前にウルトラマンの像が建てられた

須田珙中

[suda kyochu]



すだ きょうちゅう
1907～1964 / 昭和を代表する日本画家。代表作に「琉球」「篝火」「正倉院」「吹雪」などがある。

須田珙中(本名・善二)は、明治40年(1907)、須賀川に生まれました。中学校時代から画家の道への志を強くし、東京美術学校本科日本画科に入学。在学中に頭角を現し始め、「ぶどう畑」が日本画会展で入選。また第2回聖徳太子奉讃展でも入選しますが、「在学中、許可なく官展への出品を禁ず」の学則に触れ、一週間の停学処分を受けるというエピソードも残っています。在学中は松岡映丘に師事し、卒業まで帝展への連続入選を果たすなど大活躍。日本画界の将来を担う若きホープとして期待されました。昭和26年(1951)に母校の東京芸術大学美術学部に進学して迎えられる。多くの優れた作品を残しています。昭和39年(1964)、珙中は心筋梗塞のため、57歳の若さで急逝しました。早過ぎる才能の喪失は、日本画界への大きな打撃となりました。昭和37年(1962)の作品「吹雪」は、近代的表現の可能性を探求し続けた彼の大きな成果の一つと言われています。



旧市体育館の舞台どん帳図柄 本市を代表する牡丹を描いた図柄のどん帳

円谷幸吉

[tsuburaya kokichi]



つぶらや こうきち
1940～1968 / 東京オリンピックの陸上競技で日本唯一のメダリスト。日本陸上競技の発展に大きく貢献。

今から50年前、昭和39年に開催された東京オリンピック。そのマラソン大会で堂々の第3位。陸上競技で日本唯一メダルを手にしたのが円谷幸吉選手でした。円谷選手は昭和15年、須賀川に生まれました。高校時代に、福島縦断駅伝で区間新記録を出し本格的な陸上競技の道へ。卒業後は陸上自衛隊郡山駐屯部隊に入隊し、練習を積みました。昭和36年の青東駅伝では3区間を走り、3区間全て新記録を樹立。翌年には自衛隊体育学校開校の第一期生として入学。中央大学経済学部にも進学し、陸上と勉学に励みました。オリンピック候補選手記録会では1万メートルで日本新記録を達成。続くマラソンのオリンピック代表選手選考会でも2位の成績を修めオリンピックへの出場を決めたのです。しかし、その後は持病の腰痛が悪化。けがにも見舞われ、昭和43年「疲れきって、もう走れせん」という遺書を残し自ら命を絶してしまいました。享年27歳。余りにも早く、早過ぎる生涯でした。



生誕70周年記念の第28回 円谷幸吉メモリアルマラソン大会 運営には実行委員会があったり、多くのボランティアも大会を盛り上げる